

古代難波津の位置をめぐる研究史(1)

西 本 昌 弘

はじめに

古代の難波津は大和政権の外港として、遣外使節の出発港となり、外国使節の到着港となるなど、重要な機能を担った。この難波津の位置を探ることは、日本古代史の大きな課題であるとともに、大阪地域史の懸案でもあるといつてよい。このため、古くから幾多の先人がこの問題について議論を積み重ねてきた。過去の議論にはいまや乗り越えられたものも多いが、なかには現在でも通用する貴重な指摘を含むものが少なくない。

難波津が淀川下流の難波地域に存在したことは疑いないが、その具体的な位置をめぐることは、主として北浜に近い高麗橋に求める説と、難波なんばに近い三津寺町に求める説とが対立しており、近年では高麗橋説の方が有力視されている。ただし、最近の研究では考古学的な遺構・遺物の検討が大きな比重を占めており、過去の研究史に関する追跡が必ずしも十分であるとはいえない。しかし、長年にわたる研究蓄積を見過ごしてしまうのは問題であろう。

そこで本稿では、江戸時代から昭和戦後期にいたる時期を対象に、古代の難波津の位置をめぐる研究の歴史を振り返ってみたい。難波津に深く関わるものとして、難波における外交・内政の拠点たる難波大郡・小郡や、外国使節の

迎接施設である難波館などが存在するので、これらの位置に関する研究史についてもあわせて検討する。

一 江戸時代の研究

まず最初に、江戸時代における古代難波津の位置に関する研究を列挙しておきたい。

① 一無軒道治『蘆分船』（延宝三年（一六七五））

難波京 ……三の浦といふこと、蘆津、汐津、難波津といふ人もあり。又御津ともいへとも、此説いつれか、是なることを知らず。予おもふに、御津とは、仁徳の皇居の津なれハ、御の字をそへたるか。敷津、高津、難波津といふ。是等に随べきか。

堀江 ……今の木津村と云所也。

大江岸 ……今の真清水より、御城の前あたりを、惣名とせるなるへし。昔日、斎宮……帰京のときは、かならず、さだまりて、立田越を経て、大江の岸を、とまりとす。

観音堂 白髪町大福院 ……寛永年中の建立也。……ひがしに、三津の八幡、西に住吉大明神、いにしへより、鎮座し給ひて、擁護の梢盛也。

三津寺 八幡并観音堂 ……三津寺ハ、是行基菩薩の止住の所也。……三津の浦、浜、松原、泊なんど、つ、け侍るも、皆此あたり也。

② 菊本賀保『日本国花万葉記』二（元禄一〇年（一六九七））

三津乃浜 同浦 難波津・敷津・高津、是を三津と云と也。又仁徳天皇の宮作り住せ給ふ地なる故、御津とも書といへり。

③ 岡田溪志『摂陽群談』（元禄一四年（一七〇一））

難波津 東生郡東高津・小橋等は、仁徳帝都たるを以て、東生に属す。……今の難波津は、惣て大坂の市中を云へり。

高津 東生郡東高津・西成郡西高津の両邑に属す。難波津の一名也。

御津 右に同じ。仁徳帝都を祝して、御津と称す。一説、難波津・高津・敷津の三を以て、三津と号るの俗語あり。

難波館 東生郡に属す。……難波の大郡は、当国今の東生郡を云。

八幡社 同所三津寺町にあり。……三津八幡と号す。

三津寺 ……西成郡大坂の市中三津寺町にあり。……亦難波の地名を以つて、三津寺と云ふとも云へり。

④ 関祖衡・並川誠所『撰津志』（享保二〇・二十一年（一七三五・三六））

郡家 已廢、存国分村。

三韓館 在安国寺坂上（以上、撰津国之三、東生郡）。

難波 海浜数郡惣号、今専称本郡。曰海、曰潟、曰浦、曰津、曰崎、曰浜、曰江、曰松原、是也。

三津神祠 在島内三津寺町、今称八幡。天平勝宝五年九月、撰津国御津村、潮水暴溢、壞損廬舎百余、即此。

三津寺 在難波村管内大坂三津寺町、一名大伴。

安曇麿寺 大坂安堂寺町、地藏石像尚存。日本紀曰、孝徳天皇五年七月、……。続日本紀曰、天平十六年、……。江家次第曰、……。按、昔齋王難波御禊野宮故蹟、亦当此西（以上、撰津国之四、西成郡）。

⑤賀茂真淵『冠辭考』卷一〇、おほともの（宝暦七年〔一七五七〕）

御津は、紀に難波御津、万葉に住吉乃御津といへるも同じ所にて、神功紀に大津渚中倉之長峽てふも、即同じ住吉の津の事と見ゆれば、御津は大津のいひ也けり。

⑥谷川士清『日本書紀通證』（宝暦一二年〔一七六一〕）

難波御津 東生郡西成郡並有此名（仁賢六年条）。

小郡西畔丘前 上古謂西郡為難波小郡（敏達十二年条）

三韓館 在東生郡安国寺坂上（舒明二年条）

⑦秋里籬島『撰津名所図会』（寛政八〜一〇年〔一七九六〜九八〕）

三韓館（同所〔今の真田山〕の北一町ばかりに旧跡あり。字を唐居殿といふ）（卷之三）

御津（皇居の津なれば御津といふ。地理は大坂より住吉に到る。三津浜・三津浦・三津泊等の古詠多し。また高津・敷津・難波津を三津といふは俗説なり）

油懸地藏（安堂寺町一丁目の衢に在す石仏なり。……『撰津志』曰く『日本紀』に見えたる安曇寺の石像なり。背面に天平十一年安曇寺の銘ありと云ん。今これを原ぬるに磕滅して見えず。今の安堂寺町も安曇寺の訛なりとぞ）

三津八幡宮（島内木綿橋筋にあり。……）

三津寺（三津寺筋にあり。古義真言宗大福院と号す）本尊十一面観世音（行基の作、長五尺八寸。寺説に云ふ、行基菩薩開基したまふなりとぞ。……またあるが云ふ。三津八幡の神宮寺といふ説あり）

敷津浦（按ずるに今の江子島安治川口九条島をいふなり。……むかしは住吉の封境広大なり。南は堺津、北は海老江・浦江にも及ぶ）（以上、卷之四）

⑧本居宣長『古事記伝』（寛政一〇年〔一七九八〕）

難波の地形今も北は大坂より南へ住吉のあたりまで、長くつゞきたる岸ありて、……古は此岸まで、潮来り、……船著て難波津は岸の上なりけむ、故し高津とは云なるべし（卷三五）。

古、難波より船発するに主と此津より発、亦此津に泊たりし事、万葉の歌どもに数多よめるが如し。かくておのづから、難波の内の一ツの地、名となれるなり。難波、古に高津の西、方海辺に、三津、里御津、浜あり、其処なるべし。【其あたり今も大坂に、三津寺町と云処ありて、三津、社三津寺もあり。……又冠辭考に、此御津を住吉の津と一ツの如く云れたるも違へり。】（卷三六）

⑨荒木田久老『難波旧地考』（寛政一二年〔一八〇〇〕）

……故おほくの古図に就て考るに、……（高津の）西に三津の江ありて、大江の岸よりしていと高く、……東に猪甘津ありて、猪飼の岡より西は高し。

⑩中村直躬『浪速上古図説』（寛政一二年（一八〇〇））

難波津 難波津八前にいふことく尼ヶ崎の北辺より江口、長柄、高津、敷津へかけて船着の凡名なり。

御津 御津は堀江川（略注）筋を東へ入こみて、今の天神橋と天満橋との間に当るへし。

⑪暁鐘成『撰津名所図会大成』（安政年間（一八五五頃））

御津（三津） 凡御津八今の天神橋と天満との間なるべし。……御津の前八今の西天満より西つかたの海原にして、

難波入江へかけての済にて、……。後に渡辺の大江の岸などいふも御津の船着に同じ。

難波津 古ハ大江岸、高津、御津等の海浜なり。今はすべて大坂の市中をいへり。

高津 難波津ハ總名にて敷津、高津、御津など南より北へつゞきしと知べし。又此岸を大江の岸と号けしは、浪打際の広々たるを以て号けしなるべし。大浦、大渡、大津などいへる同じ。

難波堀江 今上町と天満との間なる大川なり。今の南堀江、北堀江といへる地と思ひ混ふべからず。今時の堀江ハ近世元祿のころ掘たる新川なり。

難波大郡 小郡 大郡は今の上町、小郡は天満の郷より長柄本庄へかけての名なり。……今玉造に国分町といへる是全く国府町の誤なるべし。国分といふべき由縁此傍辺に有べからず。然れば此地は其始ハ鴻臚館の旧趾なり。古歌に詠る国府巨も此近辺をいふなるべし。

国府旧趾 今の石町をいへり。国府町を誤つて石町といふとぞ。又玉造国分町といへるも国府町の誤りなりと云。

安曇寺旧趾 松屋町すじ内安堂寺町北東角なりと云。……又船場安堂寺町油掛地藏の地を以て其古跡と言ひ伝ふる説もあれども、今京師山科安祥寺に撰州渡辺安曇寺の鐘といへる有と扶桑鐘銘集に見へたり。然れば此上町の方を旧

地とすべきか、後人尚考ふべし。

以上、江戸時代における難波津に関わる研究をみてきた。論者の意見はそれぞれに特徴があり、一致するところが少ないが、あえてまとめると以下のようになる。

第一に、三津（御津）や難波津は難波地域にあつた複数の港津の総称であるとみる説が多い。①『蘆分船』や②『日本国花万葉記』は三浦（三津）とは敷津・高津・難波津をさすと述べている。この意見は、③『撰陽群談』、⑦『撰津名所図会』によって俗説として退けられたが、後世に一定の影響を及ぼすことになる。⑦『撰津名所図会』は御津は大坂より住吉に到るとし、⑧『古事記伝』は難波津は岸の上であり、ゆえに高津というとする。また、⑩『浪速上古図説』は難波津は尼崎の北辺より江口・長柄・高津・敷津へかけての船着の凡名であるとし、⑪『撰津名所図会大成』は難波津は総名にて、敷津・高津・御津などが南より北へつゞくと述べている。難波津が難波地域の港津の総名であり、そのなかに高津や敷津が含まれるという言説は、このようにして江戸時代には広く主張されるようになった。しかし、こうした理解は必ずしも具体的な根拠を伴うものではなく、③に「今の難波津は、惣て大坂の市中を云へり」⑪も同様）とあるような、江戸時代における難波津の字義を多分に引きずっているとみるべきではないか。

第二に、三津（御津）や難波津の具体的な位置については、これらを総称とみる認識の影響もあって、特定の地点に限定しようとする議論は低調であるが、それでも、当時の三津寺町を三津の浦・三津の泊と結びつけて理解する説が、①『蘆分船』や⑧『古事記伝』によって唱えられている。ただし、⑧が難波古図をも参照している点は注意を要する。他方で、⑩『浪速上古図説』と⑪『撰津名所図会大成』は、御津は「今の天神橋と天満橋との間に当るべし」と述べており、御津を大川沿岸部に求める意見も出現していることは注目される。

第三に、③『撰陽群談』が難波大郡は東生郡をいうとし、⑥『日本書紀通證』が西郡（西成郡）を難波小郡となすというように、十八世紀にはすでに大郡＝東生郡説、小郡＝西成郡説が唱えられていた。大郡が東生郡をさすすると、大郡と関わると思われる難波館や三韓館が東生郡内に比定されるのは、当然のなりゆきといえよう。③『撰陽群談』は難波館は東生郡に属すといい、④『撰津志』や⑥『日本書紀通證』は三韓館は安国寺坂上にありとし、⑦『撰津名所図会』は三韓館を真田山の北一町許りの字唐居殿にあてている。一方で、④『撰津志』は東生郡の郡家が国分村にあるといい、⑪『撰津名所図会大成』は玉造の国分町は国府町の誤りで、この地は鴻臚館の旧趾であるとした。第四に、安曇寺の故地について、④『撰津志』はこれを大坂安堂寺町に比定し、地蔵の石像がなお存すとした。⑦『撰津名所図会』はこれを継承して、安堂寺町一丁目の衢に在す石仏を油懸地蔵と称し、今の安堂寺町は安曇寺の訛ったものと説いた。④⑦の安堂寺町＝安曇寺説に対しては、⑪『撰津名所図会大成』が安祥寺鐘銘に「撰州渡辺安曇寺」とみえることから、疑問を呈しており、「後人尚考ふべし」としたが、安堂寺町＝安曇寺説はその後も無批判に継承されてゆくことになる。

二 明治・大正・戦前期の研究

次に、明治以降、昭和戦前期までの古代難波津の位置に関する研究をみてゆきたい。

⑫著者未詳『浪華百事談』（明治一八年（一八九五））

三津の浜、三津の松原 大友の三津の里、三津の江、三津の浦、三津の浜、三津の松原等、……。三津の里は方今鳥之内にあたり、三津の浜は其西端なるか。

御津八幡宮 鳥之内御津八幡宮（以前は三津と書す。近年御津と改らる。三津は三津の浜に古へ鎮座なるを以てなり）。……一説に、当社は三津寺の鎮守の神とも云ひ、又は三津寺は当社の神宮寺なりと云ひ定かならね共、古図には八幡宮はあれ共、三津寺のなきを以て考ふれば、三津寺は神宮寺といへるは実ならんかと、余は思へり。

⑬吉田東伍『増補大日本地名辞書』第二卷（富山房、一九〇〇年）

難波津 古は難波大津と称す。今東成西成二郡の地にわたり、墨江の津大伴の津（御津と云）の両処あり。

東成郡 古へ東生郡に作る。難波津の東南部なり。初め難波大宮此に在りけるを以て難波大郡と称したり。

難波大郡館址 蕃客を置かれたる亭館なり、難波館又津館と云ふに同じ。……撰津志、書紀通証等に難波館は安国寺坂上に在りと云。……安国寺坂上と云ふ者之を指すに似たり。今大阪市上町南区東区の交界の辺なるべし。

渡辺 又渡部に作る。難波江の渡口の地を云ふ。……堀江の渡の辺なる故に渡辺と云しなり。橋のありし時もあり渡辺橋と云りき。其橋は今の天神橋のあたりとぞ。

安曇江 東横堀の旧名なるべし。古へ江畔に阿曇寺あり。今堀の東西に安堂寺町の名存す。

御津 古へ渡辺の船津なり。今南区鳥之内に三津寺町の名存す。之に因て当時を推すに難波江は渡辺（長溝郷）より西南に流れ、御津（雄伴郷）を以て泊処と為したり。

三津寺 ……此寺寛永中の再興にて大福院と称す。又三津八幡宮あり古の禊所址にやあらん。

西成郡 古の難波小郡なり。

⑭飯田武郷『日本書紀通釈』（明治書院、一九〇二～〇九年）

葉渚 ……難波御津、仁賢紀に見え、難波三津之浦、斉明紀にみゆ。古昔難波の船多く此津より発せしこと、万葉歌に見えたり。又大伴御津とも云（仁徳三十年条）。

難波御津 ……難波古図に、高津の西方海辺に、三津里三津浜ありと云り（仁賢六年条）。

館 ……さて浪華名所図会、難波館址は、撰津国東生郡真田山の北一町許に在りて、字を唐居殿と云とあり（継体六年条）

難波大郡及三韓館 ……さて難波大郡は、東生郡にて。…三韓館は、…古蹟在安国寺坂上、と撰津志にあり。

撰津名所図会、東生郡真田山の北一町ばかりに旧跡あり。字を唐居殿と云とそとあり（舒明二年条）。

⑮幸田成友『大阪市史』第一（大阪役所、一九一三年）

難波大郡・難波小郡 難波館といひ、隋使の為に造りし新館といひ、共に難波大郡にありしなり。難波に大郡小郡の別あり。…和銅年間郡名の文字を定むるに及び、大郡は東生郡となり、小郡は西成郡と称せしなるべし。

難波館の遺址 難波館は後に改めて鴻臚館といひ、仁明天皇承和十一年、国司の奏請によりて、本国の国府庁となれり。今城の東南に当れる北国分町○旧称は、古く国府町と称せしといへば、或は国府即ち難波館の遺址なるか。撰津志に安国寺坂の上とすれど、其理由を附記せず、可否を決するに由なし。

安曇寺 ○撰津志に安曇寺を今の安堂寺町にありとするは、字音に泥める説といふべし。尚古年表載する所山科安祥寺嘉元三年の鐘銘に、「撰津渡辺安曇寺供鐘一口」云々とあれば、大川の畔にありしにて、江家次第に難波三所禊の一所安曇口とあるによく合へり。

⑯次田潤『万葉集新講』（成美堂書店、一九二一年）

大伴の御津 「大伴の御津」は難波津である。難波津といふうちにも、「住吉の津」と「大伴の御津」とあつた。「大伴の」は枕詞である。大伴は西成郡雄伴郷の地で、御津はその内にあつて、今日の大阪の長堀・道頓堀のあたりに当ると云ふことである（六三番歌）。

⑰井上正雄『大阪府全志』卷之二（大阪府全志発行所、一九二二年）

油掛地蔵 油掛地蔵は安堂寺橋通一丁目板屋橋筋明善寺の境内にあり。…地蔵は頗る古仏にして其の背には「天平十一年安曇寺安置」の十字を刻せしと伝ふれども、今は磨滅して認め難しといふ。書紀通證及び撰津志は此の地を往古安曇寺のありし所にして、地蔵は安曇寺の石像なりとせり。

御津 三津寺町は其の附近に亘りて御津の称あり。御津は難波に於ける往時の津頭なり。此の津頭ありしを以て難波の内に難波津の称起り、難波津の津の字に御の字を冠して其の津頭を難波の御津と云ひ、略して単に御津と呼び、難波津の内に於ける津頭の称たりしが、後遂に其の地名となれり。故に難波の津と書して此の御津を指せるものあり。又は難波水門・難波門とせるもあり。…仁徳天皇紀に見ゆる大津は此の御津なるべし。又古事記同天皇の段に見ゆる御津前も此の附近にして、孝徳（聖武の誤りか）天皇紀に海潮溢れて盧舍壞損し百姓の漂没したる御津村も、此の附近なる部落たりしならん。

⑱豊田八十代『万葉集新釈』（広文堂書店、一九二五年）

御津 御津は今の大阪市三津寺町のあたりなるべく、大伴はこのあたりより浜寺あたりまでの總称なり（六三番歌）。

⑲豊田八十代『万葉地理考』（大岡山書店、一九三二年）

みつ 撰津国大阪市に在り。今の三津寺町のあたりなるべし。

⑳山田孝雄『万葉集講義』巻第一（宝文館、一九二八年）

御津乃浜松 ……「御津」は難波の津をさす。この津は御津とも大津ともいへる地なるが「御津」といふ由はもと大御船の泊つる津の義なりしが、固定せしならむ。……この地をば今大阪市中の三津寺町といふ地に名残を止めたりといふ説あり。又今の武庫郡今津の辺なりといふ説あり。……今の大阪の辺にありきといふ説信すべし。さて大阪の三津寺といふ地は古、御津寺のありしが故の名と知られたり。御津寺は古今集雑下の詞書に「難波のみつの寺」とあり、又江家次第に伊勢斎王帰京の事を述べたる条には、……難波三津浜に於いて禊あるべき由を載せ、その禊終りて三津寺にて諷誦ある由を載せたり。その三津寺の海辺を三津浜といひ、その浜に近くありし寺を三津寺といひしならむ。されば、大阪の方にありといふ説信すべきなり（六三番歌）。

㉑八木博「難波堀江の研究」（『好古趣味』二、古代難波文化研究号、一九三〇年）

難波津 其の（難波の）一廓に貝柄町、船出町、高岸町、敷津町、鷗町、水崎町、河原町、西浜等の多く港津海岸に因んだ町名を存すること。又昨春難波駅新築地下工事中、地表下約二十尺の所で一面の貝層に出会った、その貝層中多数の古代土器を発見されたる事。之れ等の資料に依て想像を逞ふすれば、飛鳥、奈良、平安朝に亘り、屢々史乘に現れて来る、難波津又は難波江の故地は、今の難波附近であらうことは動かない所であらう。

安曇江 奈良朝頃此の東横堀川を安曇江と呼んで居たものたることは古くから言ひ伝へられた所で、此の江畔に往

古安曇寺なる寺があつたもの、様で……其名のみ今安堂寺橋通りとして残つて居る……

㉒沢瀉久孝『万葉集新釈』上巻（星野書店、一九三一年）

大伴のみ津 難波のみ津の事で、大伴は此の辺の大名である。さ、なみが志賀辺の大名であると同じである。大阪南区島の内に三津寺町の名が残つてゐる。今の長堀、道頓堀の辺が三津のあとであらうと云はれてゐる（六三番歌）。

㉓『大阪府史蹟名勝天然記念物』第五冊（大阪府学務部、一九三一年）

御津 南区島ノ内に三津寺、三津寺町あり。併し此名あるを以て、昔の御津を直ちに此処なりとは、定め難し。只此名によりて、当時を推せば、難波江は、渡辺（今の八軒屋附近）より西南に流れ、御津を以て泊処となしたりとも思はる。

三韓館址 ……難波大郡は東生郡にして、高麗館と云ひ三韓館といふは即鴻臚館なり。其所在は今の大阪城址の南方真田山なりとも唐居殿なりともいひ、撰津志は安国寺坂上にありといへり、何れも大阪城址の南方真田山の附近を以て其の所在地とすれども正確には其遺跡を定め難し。

㉔天坊幸彦『古代の大阪』（湯川弘文社、一九三六年）

……難波津に泊つといへば、海岸の凡てを指したもので、津国といひ撰津といふは、それから起つたのである。しかし船の大なるものに、自からなる其発着の場所に制限が出来る。かくして著名になつた場所が三ツばかりある。南にあるものは住吉津、其北にあるものが御津、最も北に位したのが渡辺津であつた。……

住吉津は墨江之津とも、名呉門とも、住吉の三津ともいつた。……

御津は御津門とも、御津浜とも、御津江ともいふた。……

渡辺津は大渡とも、大江とも、大津とも、難波門とも、窪津とも、国府大渡ともいふた。……大伴の三津といふのもこゝをいふのであつて、……遣唐使の如き大船は、多くこゝから出発したもので、そのことは既記住吉神代記にも遣唐使の出発の地を長柄船瀬とし、其内に大江といふのが指定されてゐる。……江口とは即ち大江の江頭のこと、支那朝鮮の往来は大抵こゝを発着点とし、住吉、三津の方は白砂青松の浜辺の美景として其名を知られること、なつたらしい。……

唯玉造より以南は平地があつて、生野村国分は国府の所在地であつたことを物語り、国分寺はそこに国分寺の名を残したものと見て然るべく、……其附近には外客を迎へる館舎があつて、玉造東雲町二丁目の唐塚が三韓館の趾だといひ、中道唐居町は難波館の趾だと伝へてゐる。

②⑤大井重二郎『万葉集撰河泉歌枕考』（立命館出版部、一九三九年）

大伴の御津 御津のミは敬称の接頭語と見るべく三津を意味しない。遣唐使或は貢朝使等の官船を送迎する港津で、難波津中最大の渡辺津に相当するものであらうと思ふ。……官船出入に用ひた御津は最も北部の地域に当つてゐたものと思はれ、最南部の住吉の御津が同じく官用船の出入せるに相応じたものである。

②⑥久保田辰彦『大阪郷土史』（大阪毎日新聞社、一九四〇年）

（平安時代に）三分された淀川の水路は、本流たる中央の中津川が最も寂れ、堀江川、三国川の方が繁盛であつた。

堀江川には江頭またの名渡辺の要津（今の天満橋天神橋の間）あり、更に下れば浪速の津、住吉の津打続き、この水路が、恰も淀川の本流の如くなり、従つて淀川といへばこの流れを指すやうになつた。

②⑦奥野健治『万葉撰河泉志考』（靖文社、一九四一年）

難波津 難波領域の諸津の總称なれど、通例難波三津を指せりと見て不都合なかるべきなり。

三津 ……通説、南区島之内の三津寺町に三津寺、八幡町に御津八幡ありて、之等が三津の地名を伝ふるに似たるものなるにより、此地を充つ。然れども……、天平勝宝五年に南海より暴風襲い、御津の部落潮水を蒙りて全滅せしとの記録によれば、南海を海にさらせる位置にありたらむは想像し得べく……、恐らく淀川より押流されし土砂の堆積により生じたる出鼻（三津埼）に位したる津なるべく、此理由を以て今の地理にて推せば三津寺町説も従ひ得べき点あり。蓋、水運の便宜上より考察するも、此津は淀川（堀江）の河口に扼り、其南岸即難波の都に近くあるべき筈なればなり。猶強て云はば、今少し北に寄れる本町辺が其故地にあらと思はるざるか

以上、明治・大正・昭和戦前期の研究を列挙してきた。ここでも諸説紛々たるころがあるが、江戸時代の研究を受け継ぐ側面に注目しながらまとめると、以下のようになる。

第一に、三津（御津）や難波津が難波地域の港津の総称であるとする点は、多くの論者に継承されている。すなわち、⑬吉田東伍は難波津は東生・西成二郡の地にわたり、墨江の津と大伴の津（御津）の両処があるとす。⑭次田潤も同様で、難波津には住吉の津と大伴の津があるという。⑮天坊幸彦は難波津は海岸の凡てをさすが、著名な場所は住吉津・御津・渡辺津の三つであつたとす。⑯大井重二郎は大伴の御津とは難波津中最大の港津で、もつとも北

部にある渡辺津をさし、最南部に住吉の御津があるとす。②⑥久保田辰彦は平安時代の淀川河口部の港津について、北から渡辺の津・浪速の津・住吉の津が存在したと述べている。

第二に、難波津（御津・三津）の位置については、三津寺町説をとるものが圧倒的に多い。⑫『浪華百事談』は御津八幡宮は三津浜に鎮座するといひ、⑬吉田東伍は難波江は渡辺（長溝郷）より西南に流れ、御津＝三津寺町（雄伴郷）をもって泊処としたとし、⑭井上正雄は三津寺町の付近＝御津は難波における往時の津頭であったとする。また、⑮⑱豊田八十代は御津は今の三津寺町の辺りなるべしとし、⑳山田孝雄は御津（難波の津）は三津寺町説を信ずべきなりとし、㉑八木博は今の難波の一郭に港津・海岸に因んだ町名を多く存することと、難波駅新築工事で地下約二〇尺のところから貝層と古代土器が発見されたことから、難波津は今の難波付近であることは動かないと論じた。さらに、㉒沢瀉久孝は大伴のみ津は難波のみ津のことで、今の三津寺町の辺りが三津の跡であろうとし、㉓奥野健治は難波津は難波領域の諸津の総称なれど、通例難波御津をさすとみて不都合ないとした上で、その三津は通説の三津寺町（三津寺・御津八幡）説に従うべきであるが、しいていえば今少し北の本町辺りがその故地であろうと述べている。

一方で、㉔『大阪府史蹟名勝天然記念物』は三津寺・三津寺町の名があるからといって、ただちに御津をこことは定めがたいという。また、難波津を大川に沿う渡辺に想定する意見も存在した。㉕天坊幸彦は渡辺津は大川とも大津とも大伴の三津ともいい、遣唐使のような大船は多くここから出発し、住吉津や御津は白砂青松の近辺の美景として知られたと述べており、㉖大井重二郎も大伴の御津は遣唐使などの官船を送迎する港津で、難波津中最大の渡辺津に相当するものであろうと論じている。御津を大川沿岸に求める意見は、江戸時代にも⑩『浪速上古図説』や⑪『撰津名所図会大成』が唱えていたが、一九三〇年代になると、難波津（大伴の三津）を大川沿いの渡辺地域に比定する見解が出てきたのである。

第三に、難波大郡・難波小郡を東生郡・西成郡にあてる説は、⑬吉田東伍、⑭飯田武郷、⑮幸田成友などに継承されており、明治期以降も定着していることがわかる。また、⑬吉田東伍は難波大郡館址を難波館・津館ともいうとし、難波館は安国寺坂上にありとする『撰津志』説を祖述している。⑭飯田武郷は難波大郡および三韓館の場所について、安国寺坂上にありとする『撰津志』の説と、真田山の北一丁許りの字唐居殿とする『撰津名所図会』の説を引いて注釈している。⑯『大阪府史蹟名勝天然記念物』もほぼ同様である。一方で、⑮幸田成友は国分町を国府すなわち難波館の遺址なるかとしており、⑰『撰津名所図会大成』に遡る国分町国府説も健在であった。

第四に、安曇寺の位置については、⑬吉田東伍が安堂寺町説を祖述した上で、安曇江は東横堀の旧名であろうという説を提示し、⑰八木博も同様の意見を述べている。⑱井上正雄も『撰津志』以来の安堂寺町＝安曇寺説をそのまま紹介している。これに対して、⑲幸田成友は安堂寺町説を「字音に泥める説」として批判し、安祥寺鐘銘に「撰州渡辺安曇寺」とあることから、安曇寺は大川の河畔にあったようで、これは『江家次第』にみえる難波三所禊の一所である安曇口ともよく符合すると述べている。⑲『撰津名所図会大成』が提示した疑問を継承して、幸田成友は安曇寺＝安堂寺町説を明確に否定したのである。

三 昭和戦後期の研究

ここでは昭和戦後期の研究として、一九六〇年までの研究を紹介してみたい。この時期の難波津の位置に関する研究は、主として天坊幸彦・北島霞江・瀧川政次郎・田中卓・山根徳太郎らによって進められたが、とくに瀧川が天坊・北島・田中・山根らと論争を繰り広げながら、その論点を深めてゆくという過程をたどった。そこで以下、それぞれの論争を再検証する形で、研究史を振り返っておきたい。

⑳天坊幸彦『上代浪華の歴史地理的研究』（大八洲出版、一九四七年）

まず、天坊は難波の範囲や難波の港津について、次のように述べている。難波の古代における範囲は、西は尼崎付近より、南は住吉付近に及んだであろう。その土地に沿った海面は、すべて難波の名をもって呼んだ。難波江・難波潟・難波浦・難波津・難波海・難波濱などがそれぞれである。そのなかで顕著な港湾として、住吉津・難波三津・渡辺津があった。なかならずく渡辺津はもっとも多くの船舶を吐吞したから、大江とも大津ともいった（八二頁）。以上の天坊説は前述した㉔『古代の大阪』での主張とほぼ同じものである。

次に、天坊は平安時代以前の摂津の中枢について、次のように説く。大和に都のあった時代における摂津の中枢は玉造以南に存し、中央行政の郡家も、国華としての寺院も、外客を迎える難波館も、みなこの方面にあった（九一頁）。当時における摂津の中枢は桑津を去る北数百町の国分であった。そこには西に国分寺があり、北には四天王寺の七堂伽藍が厳かに立ち、外客滞留の三韓館すなわち百済客館・新羅館・高麗館があった。三韓館は難波館ともまた津館ともいわれた（八九頁）。以上の天坊説は摂津国の中枢を玉造南方の国分町に求め、この付近に郡家・国分寺・難波館などが存在したとみなすもので、その淵源は④『撰津志』や⑪『撰津名所図会大成』に遡り、⑮幸田成友の見方にも連なるものであった。

さらに、天坊は大治五年（一一三〇）三月一三日付けの東大寺文書などにみえる新羅江庄の四至「東安曇江、南堀江」を検討した上で、安曇江や三津の位置を次のように考証している。『行基年譜』天平一六年条の大福院（御津院）は、延喜民部式にみえる摂津国堀江寺のことではあるまいか。そうすると、堀江は今の長堀に相当し、安曇江は今の東横堀として残ったことになる。新羅江一帯の沿岸は御津の名をもって呼び、また三津とも書いた。三津には神社が

あったが、この神社がのちの三津八幡であるかどうか明らかでない。『江家次第』の齋宮三所祓（三津浜下方・三津浜・安曇口）は順次南より北に進んで行われたが、三津寺の僧が諷誦を勤めている。その三津寺が今に三津寺町としてその名を残している（一〇三〜一〇六頁）。以上の天坊説は安曇江を東横堀にあてる⑬吉田東伍説を継承した上で、堀江を長堀に比定する見方を打ち出し、この堀江をはさんで北に新羅江庄（や御津・安曇寺・堀江寺）、南に長溝郷・三津寺・三津下方を配置する想定案を示している（一〇三頁の想像仮定地図を参照）。しかし、『行基年譜』の大福院（御津院）を堀江寺にあてながら、堀江寺（御津院）とは別の場所に三津寺を想定するのは問題であろう。また、『行基年譜』は大福院（御津院）を西成郡御津村にありとするので、三津寺を長溝郷に配置する天坊説も疑問である。

㉑北島霞江「近畿万葉地誌（四）撰津国の部（6）」（『史迹と美術』二二六九、一九五七年一月）

㉒瀧川政次郎「明治十八年の淀川大洪水と上代の難波」（『史迹と美術』二七三、一九五七年五月）

㉓北島霞江「近畿万葉地誌（四）撰津国の部（10）」（『史迹と美術』二七五、一九五七年八月）

㉔瀧川政次郎「奈良時代における難波の地理について」（『史迹と美術』二七七、一九五七年一〇月）

まず北島は㉑において、次のように説いた。玉造の南北は内外船舶の輻輳する良港であったので、ここにまず難波の地の名称ができ、外人を迎える鴻臚館・百済館・高麗館・難波館・津館があり、また国府庁・国分寺が建てられた（二三〜二五頁）。今の船場を中心とする地域はまったく海中か浮洲の群がる人跡未踏の地であったので、船舶の集合碇泊する難波津または難波の三津をここに推定するのは当を得ていない。難波津もまた玉造江に求めるべきであろう（二七〜二八頁）。玉造の南北に国府・国分寺や難波館を想定する北島説は、⑪『撰津名所図会大成』や⑮幸田成友の見解を受け継ぐものであった。

北島説に対して、瀧川政次郎は③で次のように反論した。『続日本紀』天平勝宝五年九月壬寅条に「摂津国御津村、南風大吹、潮水暴溢、壊損廬舎一百十余区、漂流百姓五百六十余人」とあるが、この御津村は明らかに船場・島の内地であって、七・八世紀の万葉時代には、船場・島の内はたしかに人民の住んでいた陸地であった。島の内には三津寺があり、船場には本願寺の津村別院がある。また、島の内の西南には港町があり、難波の名残りであるナンバがある。難波の御津が上町台地の東側にあったのは、応神・仁徳の時代であって、推古朝以後の難波の御津は上町台地の西側にあった。そのことは昭和六年の地下鉄の工事に多くの土器が出土し、昭和四年の難波駅拡張工事の際にも、地下二〇尺から土器が出たことが証している（一六八頁）。

瀧川のこの反論に対して、北島は③において次のような反批判を行った。欽明く舒明朝頃は玉造江のもっとも栄えた時代で、そこに国府も鴻臚館もできた。奈良朝末期頃は土砂の堆積で玉造江が船着として価値を損ずるようになったので、難波堀江の川口にある難波津（三津）に延暦一四年に国府が遷され（今の石町）、高麗館も移転し（高麗橋）、ここが繁盛するようになった。天平勝宝五年の御津村は天満川沿いの大江の岸なる三津である（二五四頁）。現在船場・島ノ内にある寺社は天正から江戸期に入ってみな他所から移してきたものである。三津寺と三津八幡宮も難波神社や坐摩神社・本願寺別院とともに大江・渡辺付近の三津から近世のはじめに移座したもので、三津の名は大江の岸の三津から持ってきたものであろう（二五九～二六〇頁）。

北島の反論に対して、瀧川は③において以下のように再反論を加えた。坐摩神社の移転については明確な史料があるが、三津寺や三津八幡の移転については何の史料もない。三津寺・三津八幡が大江の岸から移ったものであるというのは、北島が唱えたまったくの新説である（三二四頁）。『江家次第』巻一二、斎王帰京次第にみえる三所祓のうち、三津浜下方は天下茶屋付近、三津浜は難波駅附近、安曇口は四ツ橋付近と考えてよい。また、ここにみえる「三津寺諷誦」の三津寺は三津寺町にある三津寺大福院の前身である。この三津寺が石町付近の大江の岸にあったなどは到底考えられない（三三九～三四〇頁）。

以上に掲げた北島・瀧川論争は、七・八世紀における難波津を玉造方面もしくは大川沿岸に求める北島と、島ノ内付近に求める瀧川との間に交わされた論戦であった。船場・島ノ内は人の住まない海中か浮洲の地であったとする北島に対して、瀧川は天平勝宝五年の御津村の記事をあげ、また昭和初期における難波駅や地下鉄の工事に伴う出土品をあげて批判している。また、三津寺や御津八幡宮は近世初頭に大江の岸から現在地に移転してきたとする北島に対して、瀧川はそのことを証する明確な史料は存在しないと、これを退けている。難波津の位置については、現在も渡辺（高麗橋）付近説と三津寺町付近説とが対立しているが、北島・瀧川論争は両説の立場から最初に正面からぶつかった論争として記憶すべきものであろう。その際に瀧川が天平勝宝五年条の御津村の記事や『江家次第』の斎王三所祓の記事を取り上げて、三津寺町説の根拠としている点は重要で、三津寺町という地名や三津寺・御津八幡宮の存在なども含めて、三津寺町説の論拠のほとんどが提示されていることが注目される。

③ 瀧川政次郎「難波の新羅江」（『日本上古史研究』一一二、一九五七年二月）

③4 田中卓「難波の堀江」（『日本上古史研究』一一四、一九五七年四月）

③5 瀧川政次郎「再び「難波の新羅江」について（上）（下）」（『日本上古史研究』一一八・九、一九五七年八月・九月）

まず瀧川は③において次のように述べた。東大寺文書にみえる難波の新羅江庄は、東限を安曇江、南限を堀江とするが、この堀江は難波の堀江ではなく、道頓堀の掘られる前にあった堀江であろう。そうすると、新羅江は島之内

の西にあった海岸としなければならぬ。島之内の西南角には三津寺町があり、三津寺がある。また三津寺の西南には港町駅がある。奈良時代の難波の船着きはこの三津寺、港町の付近であったに相違ない。ゆえにここに難波なればの地名が残っているのである（三四―三五頁）。

この瀧川説に対して、田中は③において次のように反論した。安堂寺町が安曇江に相当するという通説に従えば、その西に当たる新羅江は、長堀川の線より北側のはずなので、新羅江が島之内にあるはずはない。新羅江は西横堀川を隔てた今の西区新町南通・西長堀北通の辺りとみるのが妥当で、南に今の堀江町があるので、堀江とは今の長堀川と空堀を結んだものに他ならない。西長堀北通には白髪橋があり、この橋の付近はかつて白髪町と呼ばれていたが、白髪町は新羅江の転訛であろう（七三―七四頁）。いわゆる難波古図はかなり信用してよいと考える（七六頁）。

田中の反論に対して、瀧川は③において次のような反批判を行った。安曇江は安堂寺橋付近の入江、新羅江は難波駅・港町駅・四ツ橋をつなぐ線にあった海岸であり、新羅江庄は三津浜の少し東、島之内の地にあった。田中は新羅江と新羅江庄とを混同している。田中のいう新町南通・西長堀北通の辺りは、奈良時代には海であったと思われ、西横堀以西の地に奈良時代の庄があったというのは、受け取れない説である（上一五五―一五六頁）。

以上の瀧川・田中論争は、新羅江や新羅江庄の所在地をめぐるもので、瀧川は堀江を道頓堀掘削以前にあった堀とみて、新羅江を島之内の西に求めたのに対して、田中は堀江を長堀川の線にあて、新羅江を西区新町南通付近に求めた。両者がともに前提とするのは、安曇江を安堂寺町に比定する『摂津志』以来の通説であるが、次に述べるように、この通説自体が疑わしいものなので、これを前提とする議論には限界があるといわざるをえない。

③⑥ 山根徳太郎「難波旧地新考」（『瀧川政次郎還暦記念論文集』二、一九五七年）

③⑦ 山根徳太郎「仁徳天皇高津宮の研究」（『難波宮址の研究』研究予察報告二、一九五八年）

③⑧ 瀧川政次郎「難波における斎宮の祓所と大江殿」（『西田先生頌寿記念日本古代史論叢』吉川弘文館、一九六〇年）

まず山根は③において、安曇江を天満川崎の東のあたりにあて、東大寺領新羅江庄の範囲を大川の北岸沿い、天満宮の南方から東の川崎までの地域と推定するとともに、安曇寺＝安堂寺町説を否定して、安曇寺は天満川崎の前面、大川の屈曲部の南方の台地上に所在していたと考えた（八九七―八九八頁）。また、斎王帰京時の三所祓に関連して、欽明朝頃に住吉神社が現在の社地に存在していたと言いつつ、むしろその頃は難波津付近の臨海の地において祭祀を執り行ったであろうから、難波津付近といえ、八軒家背後の丘陵こそともふさわしい場所であると論じた（九〇四―九〇五頁）。

次に山根は⑦において、東大寺領新羅江庄の四至を検討して、以下のように説いている。天坊・瀧川・田中らは堀江を今の大川と考えることを避けているが、奈良時代の堀江を大川に充てて何の支障もない（二六頁）。安祥寺鐘銘に「摂州渡辺安曇寺」とあるので、安曇寺は天満橋南詰あたりの台地上に位置し、その前方の水域が安曇口、それにつづく天満橋上流の屈曲部、川崎あたりの水面が安曇江となる。平安時代における難波津は現在の大川地域に限られていたとみるべく、『江家次第』斎王帰京次第、三所祓の三津浜下方とは海辺に近いあたり、三津浜は難波津の近接地で八軒家付近とすべきである。三津寺なる名称は通称で、安曇寺がそれにあたるのではなからうか（二一―二二頁）。

以上の山根説に対して、瀧川は⑧において以下のように論評している。鎌倉時代の安祥寺鐘銘がもつ証拠力と、安堂寺町＝安曇寺転訛説のもつ証拠力とは、比較にならないので、私はかつての新羅江＝島之内説を改め、山根の安曇江＝川崎の水面説に賛成する（三八九―三九三頁）。ただし、難波の三津は山根のいう堀江の三津には限られず、難

波津はそれらの港津の総称である。三津寺の名が島の内にある以上は、その西方にも津があって、それも難波の御津と呼ばれたに相違ない。この船津は堀江の三津と区別して大伴の三津と呼ばれたが、この大伴の御津が外国通いの大船の発着所であった。『江家次第』の三所祓のうち、三津浜はこの大伴の三津の浜、三津浜下方はその南寄りの南海電車難波駅付近であろう。三津浜下方の禊は住吉の禊に擬すとあるので、三津浜は住吉大社に近い、もしくは住吉大社に向かう途中の浜でなければならない。したがって、山根が三津浜下方を大川河口とするのは当たらないと思う(三九三―三九六頁)。

以上の山根・瀧川論争は、難波津を大川沿岸に求めるか、三津寺町付近に求めるかの論戦であるが、山根の指摘をうけて、安祥寺鐘銘のもつ証拠力を認識した瀧川によって、『撰津志』以来の通説であった安堂寺町Ⅱ安曇寺説の問題点が明らかになり、新羅江庄や安曇江は大川沿岸に比定すべきことがほぼ確定したといえよう。『江家次第』所載の齋宮三所祓の場所について、山根は大川に沿って東西に連なると考えたが、瀧川は三津浜下方の禊が住吉の禊に擬すものであったから、三津浜・三津浜下方とも安曇口から住吉大社に近い住吉大社に向かう途中の浜でなければならないとした。三津寺・御津八幡宮の存在とともに、この齋王三所祓の記事をどのように読み解くのが、難波津の位置を突き止める上で、大きなカギになることは間違いないであろう。

小結

古代難波津の位置をめぐる研究史について、江戸時代から明治・大正・昭和戦前期をへて、昭和戦後期に至るまでの流れを振り返ってきた。最後に簡単なまとめを行っておきたい。

江戸時代には、敷津・高津・難波津を三津と称すとか、難波津は難波地域の港津の総称であるなどと考えられているが、こうした見方には具体的な論拠がある訳ではなく、当時の難波津は大坂市中をさす総称であったことに引きずられた解釈ではないかと思われる。明治期以降には、住吉津と大伴津を難波津と称したといい、昭和期に入ると、南から住吉津・大伴津・渡辺津が存在したと考えられるようになった。ただし、難波津が本当に総称であったのかどうかについては、『古事記』『日本書紀』などと『万葉集』などの歌謡文献とを弁別しながら分析する必要があるだろう。難波津の中心となる三津(御津)は三津寺町にあったとする見方が江戸時代以来定着してきたが、一九世紀の交には御津を大川沿岸に求める説が出現した。明治期以降も難波津Ⅱ三津寺町説が多数を占めたが、天坊幸彦・大井重二郎によって難波津(大伴の三津)を大川沿いの渡辺地域に比定する見解が唱えられ、これが昭和戦後期の天坊・山根徳太郎説に継承されていった。難波津Ⅱ大川沿岸説に対しては、三津寺町説に立つ瀧川政次郎が精力的な批判を行っており、議論の分岐点はほぼ明らかにされた感がある。瀧川らが組上に載せた『続日本紀』天平勝宝五年九月条や『江家次第』齋宮帰京次第、三所祓などの記事を丹念に検証してゆくことが、問題を解決に導く上で不可欠の作業であることは間違いない。

難波大郡・小郡や難波館などの位置も、難波津の位置と関わる重要な論点であるが、江戸時代には大郡を東生郡の古称、小郡を西成郡の古称とみる説が通説化していたので、難波館を東生郡内の玉造周辺、安国寺坂上、真田山近辺の字唐居殿などに求める見方が定着し、安曇寺の位置も安堂寺町説が長く受け継がれてきた。しかし、早く『撰津名所図会大成』や幸田成友が注目し、戦後に山根徳太郎や瀧川政次郎がそれを継承したように、「撰州渡辺安曇寺」と明記する安祥寺鐘銘の史料的价值は高く、安曇寺は大川沿岸の渡辺地域に存在したと考えるべきである。安曇寺Ⅱ安堂寺町説と同様、難波館を安国寺坂上や唐居殿に求める説は、何ら確証を伴わない地名転訛説にすぎず、大郡Ⅱ東生郡説、小郡Ⅱ西成郡説と同様、根本的に考え直す必要があるだろう。

古代難波津の位置に関する研究は、一九六〇年にいたるまで以上のような成果と課題を残し、その後の研究に受け継がれてゆくのである。

〔謝辞〕

本研究はJSPS科研費JR15K02848の助成を受けたものです。